
みんなで楽しく「いただきます！」

シルヴィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みんなで楽しく「いただきます！」

【Nコード】

N7772N

【作者名】

シルヴィ

【あらすじ】

SOS団全員で訪れたバイキングレストラン。みんなで楽しく食事をするはずだったが、何かを勘違いした団員が2名いた。

(前書き)

若干、古長？

金曜日の放課後、最近開店したバイキングレストランにSOS団全員で襲いかかることになった。

「襲いかかる」ではなく「食べるに行く」の間違いでは？はい。そのご指摘は正しい。しかし、文字通り襲いかかると表現したほうが正しいメンバーがSOS団に2名存在する。名前は涼宮ハルヒ及び長門有希。女子高生とは思えない胃袋の持ち主だ。「お食事会」という言葉だけ見れば楽しい話だが、それが恐怖体験になるとは、誰も予測できるまい。ねえ、朝比奈さん、未来から見ればこれも既定事項ですか？

「キョン！これみんな食べ放題なんてすごいわ！アンタも全部食べなさい！」

「食べるか！胃袋が破裂するだろ！」

「まったく、バカキョンのくせに！食べるときぐらい、いいところ見せなさいよ！」

うるせえ。バカと食欲に何の関係がある。俺にわかりやすく100文字以内で説明しろ。

「あ、有ー希ー！新しいパスタきたよー！全部食べちゃいましょう

」

「わかった。」

SOS団ナンバーワンの大食漢。実は一番小柄な長門。この情報統合思念体謹製のアンドロイドは胃袋が宇宙につながっているらしい。長門はペースを一切変えることなく、無表情に食べつくしては皿を積み上げていく。まったく、この小さな体に恐ろしく似合わない皿数だ。

2番手は団長様。核融合炉の輝きを持つハートと同じくらいに燃え

さかり、一皿に複数のおかずをエベレストのように盛り付けては平らげる。それが制限時間内の間、延々と続くのだ。

「おふたりともすごいですねえ。」

マイスウィートエンジンジェル朝比奈さんが、大きな瞳をさらに大きくして感心する。朝比奈さん、ここは何回でも、おかわりしてもいいレストランですよ。もっとお食べになったらどうですか？そんな少食では、あんまりにも払ったお金が損です。

「あ、私：少食で、食べ放題は苦手です。」

うつむきながら、コメントする朝比奈さん。ああ、その恥じらいの仕草がたまりません。うんうん。やはりあなたは、俺のイメージどおりのお人です。ハルヒレベルの大食漢朝比奈さんなぞ、想像できません。でも、ぜひお聞きしたいのですが、そのすばらしいバストは、どうやってできたのでしょうか。やはり栄養分がそこばかりに：いかん、そんな妄想しているヒマがあったら俺ももう少し何か食べよう。せっかくの食べ放題だ。思う存分食べるのが王道ってものだ。

「そういえば古泉君、全然帰ってこないわね。どこいったの？」

「そうですねえ。」

古泉は、大食いなのか少食なのかまったく不明だ。市内不思議探索ツアーでも、昼はおよそ「普通」といわれる量しか食べていない。忌々しいが、身長 180センチ（本人は178だと言いつ張るが178も180も同じだ。ああ、忌々しい。忌々しい。）の体を維持するには、ちよつと食事が少ないような気がする。普段、閉鎖空間で肉体労働もしているのだから、俺はもう少し食べるべきだとは思うね。神人狩りの最中に空腹で倒れたら、永久に「機関」のお笑い伝説にされちまうぞ。

「俺、ちよつとおかわり行ってくる。」

から揚げとフライドポテトを取って帰ってくると、俺たちのテーブルから黒い瘴気が上がっているのがはっきりと視認できた。ハルヒ

と朝比奈さんが口をあんぐりあけて、少々引き気味になっている。朝比奈さんはすでにおびえきつて、目に涙。長門はほんの少し目を大きくして黙々とピザを食べている。

「こ、古泉君、いきなりそれは…栄養がかたよるわ。体によくないわよ。」

「ごはんとか、おかずとか食べないのですか？」

俺はようやく帰ってきた古泉の皿を見る。

「お前、それ何のジョークだ？」

「僕の晩御飯です。それにここはバイキングレストランでしょう？ 食べたいものを、食べられる分だけとってくる。お皿に残さないのがマナーです。ちゃんと食べますから安心してください。」

「いやいやいや、そうじゃなくて。」

「だったら何ですか？」

古泉の目が「僕の邪魔をしたら、殺しますよ。」と言っている。

古泉の皿に、綺麗に盛り付けられた20個前後の各種ケーキ。もう一皿は6種類ほどのチョコレートフォンデュ。量を数えるのが嫌になるくらいに盛り付けられ、しかもいつ洪水をおこしてもおかしくないほどのチョコレートがかかっている。正直、見ているほうが気持ち悪い。

「ひえええ〜。古泉くん、これ全部食べるのですかあ？」

朝比奈さんが驚きとも恐怖ともなんともいえない感情をまぜてかわいなお声をだす。気持ちわかります。

「ユニーク。」

「そうですか？」

「糖分だけではバランスが悪い。」

「体を動かすカロリーがあれば充分です。」

俺たちがそれぞれの方法で食事を楽しんでいる中、古泉はデザートだけを取ってきた。ハルヒレベルの量に長門レベルの食事ペース。大柄な男子高校生が皿にケーキを山盛りに行っているだけでも不気味

なのに、いつもの笑顔仮面、いや一切の感情が消えて、無表情でひたすらケーキと口の間をフォークがメトロノームのように規則正しく往復している。しかし、景観としてはホラー以外なにもものでもない。俺たちの騒ぎを見たほかの客も、長身イケメン君のスイーツオンリープレートと脅威の食事ペースをちらちらと眺めていた。

「皿数が一緒になった。」

「長門さん、食事は勝負ではありませんよ。」

いやいやいや、どう考えてもあなた方のやっていることは食事ではなくバトルです。もし、有刺鉄線電流マッチをやるなら、どうか他所でやってください。

長門はいろいろなおかずを食べるが、古泉はデザートしか食っていない。プリンや水菓子がはいっていた小皿が山のように積み重ねられていく。それに明らかに対抗心をむき出しにして長門も皿を積み上げる。「あーおなかいっぱい。私はもう限界よ！2人とも残さないで食べなさいよ！」

「お前の食欲も、充分人間の限界を超えているな。」

「いつちいち、アンタはうるさいわね！だったらあの2人は何よ！」

「静かにしてください。迷惑です。」

クリームやチョコプレートで少し汚れ気味の古泉の口から冷たい仲裁の言葉が放たれる。目が完全にキレているな。やばい。ここでハルヒの機嫌を損ねて、閉鎖空間が発生し、召集がかかったら、逆にコイツが世界を壊しかねない。

「あ…ごめん、古泉君。悪かったわ。」

さすがのハルヒも圧倒され、少し怯えていた。古泉は明らかにハルヒを睨み付けていたからな。あの目で睨まれたら、誰だって怖い。昔、ドアを開けたとたんにナイフが飛んでくるという、とんでもない推理ゲームがあったが、この勝負の邪魔をしたら、マジで心臓めがけて古泉がナイフを飛ばしてきそうだ。

「しよせんデザート。種類も少ない。」

長門がパスタを持ってくる。たった今、新しくフライパンのまま出されたトマトパスタをすべて、自分の皿に移しているのを俺は見た。長門、店の人に怒られるぞ。少しずつとってこい。

「でもさっぱりした味でどんどん食べられますね。」

古泉よ、そのティラミス、どうみても、新しい入れ物から9割分はとってきただろう。他の客のことも考えろ！しかも何だ！ピザ満載の左手の皿は！

「さすがに、甘いものも少し飽きてきました。口直しに違うものをお思いまして。」

「わたしに勝つ気？古泉一樹。」

「長門さん、お食事は勝ち負けではありません。みんなで楽しくいただくものです。」

お前ら、他の客のこと考えずにパスタやティラミスを丸々取ってきて何をほざく！

「なかなかピザもおいしいですね。今のお皿の分を食べ終わったら、もう一度ピザと、あとパスタもいただきましょう。長門さんを見ていたら、僕もパスタを食べたくなりました。美味しそうですね。」

「ティラミス：あなたが全部食べた。私も食べる予定だった。」

「ちゃんと他のお客様の分も残していますよ。あなたみたいに、出されたお食事を全部皿には入れていませんから安心してください。」

「：パーソナルネーム 古泉一樹 敵性と判定。空間情報操作及び有機情報連結解除…」

やばいつ！長門、こんなところで情報操作はやめろ！ハルヒがいるぞ！！古泉、お前も長門を挑発するな、ボケ！！

俺はテーブルごと異空間にワープさせられることを覚悟したが、風景は変わらなかった。

「すみません！お時間です！」

店員さんが、食べ放題タイム終了を宣言してくれたからだ。助かった。世界崩壊の危機は回避されたのだ。俺と朝比奈さんは椅子からずり落ちそうになるのをかろうじて耐え切った。ハルヒは大きなた

め息をつく。

「店員、空気読め。」

「何かおっしゃいましたか、長門さん？」

「別に。」

優雅に食後の紅茶をすする古泉、最後にソーダを飲む長門。微妙にまだ火花がくすぶっている。

「今日は引き分け。」

「長門さん、僕の言うことも少しは聞いていただけませんか？食事は勝負ではないですよ。」

「わかった。だが、あなたはもう少しバランスよく食べるべき。」

「カロリーが摂取できたら充分です。」

「体によくない。」

ん？長門？今なんて言った？

「ねえ、キヨン、有希、今確かに、古泉君に「体によくない。」って言ったわよね。」

「ああ、そう聞こえた。」

「私もそう聞こえましたよ。確かにそう聞こえました。」

異次元胃袋バトルを戦い抜いた2人はすでに独自の世界ができていくようだ。だが、決してそれは甘いムードではない。おそらく、川中島の戦いにおける武田信玄と上杉謙信のようなものだろう（推定）

「もうすこしビタミンやアミノ酸等の栄養素を摂取すべき。有機生命体構成情報にエラーが発生する可能性が非常に高い。今日のような栄養摂取行為は推奨できない。」

「ご心配、痛み入ります。でも、僕は甘いものが大好きなので、バイキングレストランで食事するときだけは許していただけますか？」

「たまになら。」

十分に胃袋を満足させた3人と、びっくりフードファイターペアで少し距離をあけて帰り道を歩く。

「有希と古泉君、ちよっといい感じじゃない？」

「ですよねえ。長門さん、古泉くんのことを心配していました。ちよつと妬けますね。」

「でも、団員同士の恋愛は禁止よ！そこはきつちり守らないと罰ゲームね！」

辞書で調べてきたような単語を並べて、常人が理解できない説明をする女と、それを理解して、納得できる男。確かに、古泉と長門はお似合いかもしれんな。あの説明と演説を理解し、お互いに「納得する」ことができるのは、あの二人しかいない。だが、今回の勝負（？）については、俺は古泉の勝ちだと思う。長門は全種類のおかずを食べていたが、古泉はデザートだけで互角に渡り合ったし、時間制限がなければパスタも食べるつもりだった様子だ。あーあ、ハルヒはともかく、いつぞやのカマドウマみたいに、俺と朝比奈さんは今回も蚊帳の外か。

数週間後のSOS団ミーティング。美味しそうなケーキがいっぱい写っているチラシを、古泉がレベルマックスのスマイルで持っている。

「今日の土曜日は、ここのスイーツバイキングに行きませんか？」
もちろん答えは、「NO！」だ！馬鹿！

「わたしは賛成する。」

もう勘弁してくれよ、長門。お前もいちいち古泉の挑発にのるな。

「バイキングは却下！アンタたち2人だけでは、二度と、二度と行かないわよ！」

「バイキングは行きたくないですう。嫌です…怖いです…」
「団長決定に異議なし。」

お前ら2人で勝手に行け！俺たちは普通に「いただきます」といいながら平和に食事がしたい。ハルヒの大食いは確かに見ているも気持ちはいいが、古泉と長門の皿数勝負は二度と見たくない。あれは人間の（長門は確かに人間じゃないが）食事じゃねえ。ただの流し込み勝負だ！

「仕方ないですね。残念です。」

「不満。」

「有希！団長の私が却下って言ったら却下なの！！行きたいなら、古泉君と2人で行ってきなさい！！」

「わかった。」

おい！即答かよ、長門！

「古泉一樹、土曜日の予定は？」

「野暮用に埋もれる土曜の午後か、あなたと過ごす甘い時間、どちらかを選べと言われたら、僕が望むことはただ一つ。行きましよう、長門さん。」

景色と会話だけなら、可憐で儂い文学少女と胸糞悪いエセスマイルキザ野郎のやりとりだが、よく観察すると、2人の間には、勝負の炎が宇宙まで立ち上っている。ああ、俺は知らん。勝手にやってくれ。少なくとも、今後一切俺を巻き込むな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7772n/>

みんなで楽しく「いただきます！」

2010年10月10日12時54分発行